

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	山 口 県
-------	-------

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	上関町立上関中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	4	10
生徒数	33(1)	30	37	(1)	100	

研究の概要

1. 研究主題

確かな学力を身につけ、主体的に学ぶことのできる生徒の育成  
～ふれあいの中で「学ぶことの楽しさ」を味わうために～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年・数学科 (生徒の理解度に差が出やすい教科であるため)

(2) 年次ごとの計画

平成14年度

**テーマ** 生徒の学習意欲の向上を図る

**仮説** 学びの機会の充実を図るため、学習環境の整備を行うことにより、生徒の学習に対する意欲が向上し、自ら学ぶ学習習慣の定着が図られるであろう。

**研究内容・方法**

**(1) 基礎学習の時間の設置・運営**

1. 基本的な考え方  
この時間は、昨年度まで行っていた「朝学の時間」を5分延長し、15分間行っている学習時間である。「朝の学習時間」は、1日の学校生活の始まりにあたり、生徒の学習に対する気持ちの切り替えや、補足的な意味で学力の定着を図ることを目的として行ってきたものである。また、「基礎学習の時間」は1日の学習の導入的時間帯を確保し、各学年の成長段階に適した学習内容と形態を取り入れた、「確かな学力」のより一層の定着を図るために実施した学習活動である。

	1・2学期	3学期
1学年	読書	自作の問題+教え合い学習
2学年	自作の問題+教え合い学習	市販プリントを活用した学習
3学年	市販プリントを活用した学習	

2. 実施方法

**(2) 数学科における少人数学級指導**

1. 基本的な考え方  
数学において、個に応じた多様な学習形態を推進するため、一斉授業に加えて、学級を分割した学習集団の編成を行うことにより、きめ細かな指導を積極的に行う。

2. 実施時期及び学年  
2学期中間テスト後、10月中旬よりすべての学年で行った。

3. 実施方法・形態(習熟度別学習クラス編成)  
「発展コース」・・・理解度の高い生徒を対象とする。  
「基礎コース」・・・標準(基準)的な理解度の生徒と、数学を不得意とする生徒を対象とする。  
基礎コースを選択した中でも理解をするのに十分な時間とアドバイスが必要な生徒への対応は、授業時間以外にも積極的に行う。

放課後の補習授業を実施する。実施人数は各学年2人程度で、約1時間行う。  
月曜(1年) 火曜(2年) 水曜(休講) 木曜(3年) 金曜(3年)

4. 評価方法

本年度から評価・評定の方法が絶対評価となり、2つのコース共通の規準を設定したうえで評価・評定になることを大前提とした。その規準となるものは新学習指導要領に示されている学習内容・目標であり、国立教育政策研究所参考資料等を基に作成した評価規準によって評価・評定を行った。また、クラスを分けたことで、授業内容（授業の流れや教材など）違いが出てくることから、教師側の評価観の誤差（見る目、指導の目の違い）については教師間で十分な共通理解を行った。学習評価に関しては、客観性の高い、公正な評価・評定にするためには、今まで以上に学習者を多面的に捉え評価・評定することが必要となる。一人一人の学習状況を明確に説明できるようにすることによって、生徒や保護者が納得のいく評価・評定を行った。

### (3) 補充学習の時間の設置・運営・評価

#### 1. 基本的な考え方

「補充学習の時間」についての基本的な考え方は、「学習スタイルの確立と各教科の補充・発展学習における個別指導」を行うために設けた時間（選択教科）である。学習スタイルの確立のための時間は、本校の生徒にとって必要な時間であると思われる。宿題や課題など家庭における学習の充実を図るためにも、学ぶ習慣を身につける「自分で学習を補充していく時間」を設定していくことは意味のあることだと考える。

#### 2. 実施方法

1 学期は期末テスト週間の6校時×5回を、短期集中型の自習形態で実施した。

2 学期からは、毎週金曜日の6校時に実施した。

#### 3. 評価方法

教師から見た具体的な評価観点項目を設定し、これを各学年統一の評価基準として、各学年の担任・副担任が評価を行う。また、生徒には、これら観点に合わせた形の自己評価を行う。以上の情報をもとに、評価・評定を行った。

観 点	具体的な評価観点
主体的・意欲的な学習態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題の準備（用意）はできているか。</li> <li>・その課題を使い、授業の開始からすぐに学習に取りかかることができたか。</li> <li>・1時間の学習態度はよかったか。</li> </ul>
自ら課題を見つけたり設定したりする力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今日の課題は、自分にとって実りあるものを選択できていたか。</li> <li>・自分のわからないところをはっきりさせることができたか。</li> <li>・次の時間に行う課題を見つけることができたか。</li> </ul>

平成  
15  
年度

テーマ 個に応じた指導方法の確立

研究の見通し 授業方法の工夫・改善を図るとともに、個に応じた指導方法を確立することで、確かな学力が身に付くであろう。

研究の内容・方法

基礎学習の時間の運営・評価の改善

少人数学級（数学科）における、個に応じた指導法の改善と工夫と教材開発及び評価方法の研究

評価方法の研究

補充学習の時間の運営・評価の改善

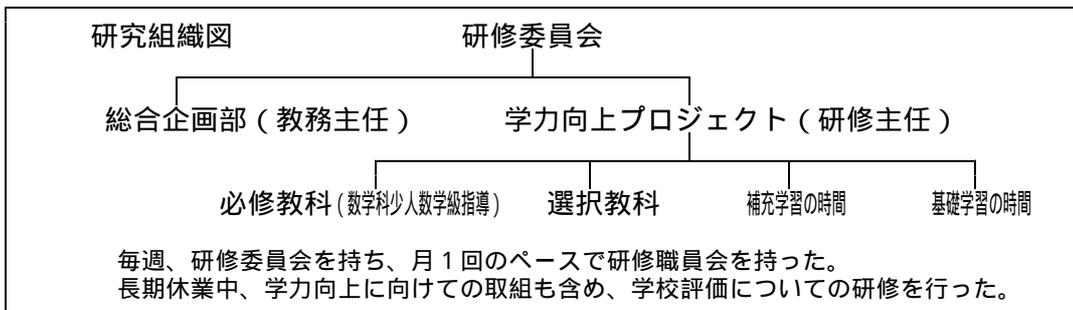
#### 変更点 授業改善アンケート（全教科）実施

本校の研修主題の中の「確かな学力」は、文科省のいうところの「基礎・基本の習得」にあてはまることである。これらの習得や定着を図るために、昨年度よりフロンティア指定校として様々な取組を行ってきた。そこで、本年度は授業改善についての具体的な取組をしていきたいと考え、その1つの方法として、生徒による授業アンケートの実施を考えた。このようなアンケート形式の授業評価の実施は、近年、増加の傾向にあり、そのようなやり方では授業改善に迫れないとの指摘があることも、また、事実である。このことを踏まえ、本校では授業評価（アンケート）を、生徒側からの意見を聞く機会としてのもののみにとどめることなく、授業というものが「生徒と教師が共に創る」という授業観の確立を図るために必要な資料として活用していきたいと考える。授業を運営していくのは教師だけではない。生徒もまた授業の一方の担い手であり、単なる第三者的な評価者にとどめてはならない。生徒も授業の一方の当事者であるとの自覚を高めることが大切であると考えた。

また、「学力向上」や「確かな学力」といったものは特定の教科のみで培われるものではなく、すべての教科、学校でのすべての活動が生徒たちの手による主体的な活動となったときに初めて身につくものであると考える。少人数学級指導を行っている数学科だけでなく、すべての教科において授業改善を行うために実施した。

平成 16 年度	<p>テーマ 生徒の学力の評価を生かした指導の改善          仮説 生徒自身が自らの学びに照らし合わせて授業評価することにより、          生徒の思いや願いが生かされた授業改善が進むであろう。</p> <p>研究内容・方法          授業評価システムの確立          第1・2年次の改善とまとめ          数学科での実践をもとにした、他4教科を含めた研究と実践</p>
----------------	--

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) 少人数学級指導について(数学科)

1. 実施時期及び学年・・・年度始めから、すべての学年で実施した。
2. 実施方法・形態(習熟度別学習クラス編成)  
 単元(学習内容)ごとに、生徒自身でコース選択を行う。  
 じっくりコース・・・基礎・基本的な課題やつまづきの多い課題を繰り返し学習することにより、確かな学力の定着を図る。  
 応用コース・・・基礎・基本的な課題はもとより、より多くの課題に取り組むことで、数学的思考力の伸長をめざす。

3. 生徒アンケート結果

2学期の途中からコース変更をした生徒の人数

(応用コース)から(じっくりコース)へ	1年生	4名
	2年生	7名
	3年生	1名
(じっくりコース)から(応用コース)へ	1年生	0名
	2年生	0名
	3年生	2名

Q1 普通学級と少人数学級を比較すると少人数学級が

平成14年度	1年			2年			3年			全学年		
	基礎	発展	合計	基礎	発展	合計	基礎	発展	合計	基礎	発展	全合計
良い	61	80	64	75	27	60	70	38	61	69	42	62
普通	39	20	36	25	64	37	30	63	39	31	54	37
悪い	0	0	0	0	9	3	0	0	0	0	4	1

平成15年度	1年			2年			3年			全学年		
	じっ	応用	合計	じっ	応用	合計	じっ	応用	合計	じっ	応用	全合計
良い	67	64	66	67	63	66	62	75	66	65	68	66
普通	33	36	34	33	25	31	35	25	32	34	29	31
悪い	0	0	0	0	13	3	4	0	3	2	3	2

\*すべての数字は%表示です

Q2 授業のわかりやすさは、少人数学級が

平成14年度	1年			2年			3年			全学年		
	基礎	発展	合計	基礎	発展	合計	基礎	発展	合計	基礎	発展	全合計
わかりやすい	74	40	68	58	9	43	48	13	39	60	17	49
普通	22	60	29	38	91	54	52	50	52	37	71	46
わかりにくい	4	0	4	4	0	3	0	38	10	3	13	5

平成15年度	1年			2年			3年			全学年		
	じっ	応用	合計	じっ	応用	合計	じっ	応用	合計	じっ	応用	全合計
わかりやすい	78	45	66	57	13	45	31	67	42	52	45	49
普通	22	55	34	43	75	52	65	25	53	46	48	47
わかりにくい	0	0	0	0	13	3	4	8	5	2	6	4

\*すべての数字は%表示です

### Q3 先生と話す回数や質問のしやすさについて、少人数学級が

平成14年度	1年			2年			3年			全学年		
	基礎	発展	合計	基礎	発展	合計	基礎	発展	合計	基礎	発展	全合計
良い	48	80	54	67	45	60	57	100	68	57	71	61
普通	48	20	43	33	55	40	43	0	32	41	29	38
悪い	4	0	4	0	0	0	0	0	0	1	0	1

平成15年度	1年			2年			3年			全学年		
	じっ	応用	合計	じっ	応用	合計	じっ	応用	合計	じっ	応用	全合計
良い	72	36	59	48	50	48	27	92	47	46	61	54
普通	28	64	41	52	50	52	73	8	53	54	39	46
悪い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

\*すべての数字は%表示です

### Q4 1学期と比べて、あなたの実力はどのようになったと思いますか。

平成14年度	1年			2年			3年			全学年		
	基礎	発展	合計	基礎	発展	合計	基礎	発展	合計	基礎	発展	全合計
向上している	70	60	68	17	27	20	26	0	19	37	25	34
変わらない	30	40	32	75	73	74	65	63	65	57	63	59
下がっている	0	0	0	8	0	6	9	38	16	6	13	7

平成15年度	1年			2年			3年			全学年		
	じっ	応用	合計	じっ	応用	合計	じっ	応用	合計	じっ	応用	全合計
向上している	17	18	17	52	25	45	27	17	24	32	19	26
変わらない	44	36	41	48	50	48	65	75	68	54	55	54
下がっている	39	45	41	0	25	7	8	8	8	14	26	20

\*すべての数字は%表示です

少人数指導も2年目となり、生徒にも定着した感がある。1年生にとっては初めてのことであり、多少戸惑いが見られた時期もあったが、アンケート結果からも前向きに捉えていることが伺える。また、2・3年生については昨年に引き続いてのこともあり、授業内容やコース選択について主体的に取り組む姿勢が身につけてきた。ただ、少人数指導に対する厳しい見方を持った生徒の意見があったことも事実で、教科担当としては耳が痛い面もあるが、それだけ生徒も期待していると考え、今後の授業改善に向けて努力していきたい。

## (2) 授業改善アンケート(全教科)実施

### 実施の流れ

- アンケート実施・・・ 7月9日(水)全校生徒に趣旨説明ののち実施
- 結果の報告・・・ 集計結果を全職員に配布(8月上旬)
- 分析と対策・・・ 教科担当は結果を分析し、改善策を検討  
教科担任は、検討案を提出(8月中旬)
- ガイダンス・・・ 2学期最初の授業で、生徒に改善点を説明

生徒は授業評価を行った結果を教師側がどのように受け止め、問題についてはどのように解決策を講じ、改善していこうと努力しているかを期待しているものだと思う。したがって、これらの生徒の要望(願い・期待)に対して、教師は、授業の中で目に見える形で反映していくことが大切であると考え、授業改善に向けてのガイダンスを行った。実際、生徒の要望(願い・期待)に対して、教科担当が改善の方向を示し、「よりよい授業を共に創りだしていこう」とするアクションを起こしたことで、その後の生徒の反応は良いものになっている。

今回のこれらの取組で得られた最大の利点は、「授業改善は個々の教師の課題であるとともに、学校全体の課題である」という意識を教職員全員が持つようになったということである。授業についての反省や改善に向けた取組を、フロンティア研修の一連の過程に位置づけた結果、教職員それぞれがもっている授業への関心を、学校評価への関心につなげていくことができ、自己診断能力が高まったということである。昨年末の、学校評価(15年度の反省と来年度に向けての課題)についての研修会では、各先生方からたくさんの意見が出され、充実した研修会が行われた。この教職員の意識改革は、授業をめぐる問題意識を発展させ、学校評価の関心につなげられた最大の成果であると考えている。

## 2. 今後の課題

### (1) 少人数学級指導について(数学科)

少人数指導のねらいである「個に応じた多様な学習形態の推進」については、教員間の

連携によりまずまずの成果が得られていると思われる。ただ、少人数による指導が生徒への目の行き届きやすさの部分に頼りすぎているのも事実である。生徒個々の実態に応じた指導がなされ、生徒も意欲を持って学ぼうとする授業をめざすことが大切であるとする。

また、中程度以上の力をもっている生徒にとっては、少人数での習熟度別学習の効果が上がってきているように感じられるが、数学を特に不得意とする生徒の学力をどれくらい引き上げることができたかを考えると、反省の余地は十分にある。基礎・基本の確実なる習得をめざし、昨年度の生徒の要望にあった「毎回の小テスト」を実施した結果、中程度の生徒の計算力は向上している。また、学年当初は応用コースを選択し、後にじっくりコースにコース変更した生徒は、中程度の生徒が多く、その変更理由も、「わからなくなった」「自分の学習のペースにあわない」「わかるようになりたい」といったもので、生徒の学習に対する前向きな姿勢が伺えた。そのため、徐々にではあるが学習の成果は上がってきている。しかし、不得意な生徒については、生徒個人の能力や学習姿勢に影響される部分が多く、なかなか良い結果を得ることはできなかった。これら生徒への何らかの取組が今後の課題となるであろう。

## (2) 授業改善アンケート(全教科)実施

これらの取組を行ってきた結果、教科の特性による問題や学級の雰囲気による問題、生徒個々の問題など、いくつかの課題が見えてきた。さらに、学力向上に向けた取組として大切なことは授業であることも、改めて痛感させられた。

今後は、これら授業の診断・評価が学校評価と結びつき、また、学校評価の結果が授業の改善につながるサイクルのシステム作りを確立しつつ、このような評価活動を定期的に継続して実施し、教師と生徒との信頼関係を高め、よりよい学校づくりをめざしていきたい。

## 学力把握のための学校としての取組

- \* 各学年、教研式標準学力検査CRTを学年末に実施(学力診断のため)
- \* 1学期末、全教科授業アンケートを実施(授業改善のため)
- \* 2学期末、少人数指導(数学科)  
補充学習(選択教科)  
基礎学習の時間(朝の学習)についてのアンケートを実施

## フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- \* 平成15年度学力向上フロンティア事業(柳井管区)協議会研究発表  
日時・場所 平成16年1月26日(月) 熊毛郡大和町立大和中学校  
参加者 柳井管内小・中学校教員 各フロンティアスクール保護者・地域住民代表者
- \* 平成15年度 研究集録作成及び配布

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】  15年度からの新規校  14年度からの継続校
- 【学校規模】  3学級以下  4～6学級  
 7～9学級  10～12学級  
 13～15学級  16学級以上
- 【指導体制】  少人数指導  T・Tによる指導  
 その他
- 【研究教科】  国語  社会  数学  理科  
 外国語  音楽  美術  技術・家庭  
 保健体育  その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】  有  無